

日中戦争下における青島の日本語文芸誌

付・『基地』『大陸短歌』『錨地』『廟』細目

Japanese Literary magazines in Qingdao During the Second Sino-Japanese War

戸塚麻子

Asako TOTSUKA

(令和元年十一月八日受理)

抄 録

日中戦争期の青島では、様々な文学・文化団体がつくられ、相互に交流をもっていた。また、近隣にある済南や北京・天津、日本内地との交流もあった。本稿では、現在までの調査で入手できた資料をもとに、青島で発行されていた日本語文芸誌について、その一斑を紹介する。対象となるのは、俳誌『基地』、歌誌『大陸短歌』、詩誌『錨地』の三誌であり、執筆者に重なりがある済南の文芸誌『廟』（日本語と中国語）も併せて取り上げた。しかしながら未確認の号が極めて多く、その全容を知ることが困難である。そのため、同じく青島で発行されていた雑誌『山東文化』掲載の記述を適宜参照しつつ、欠落した部分を補った。また、『山東文化』を第三巻第一号から発行した青島文化聯盟について、青島の文化統合との関連において述べた。

最後に『基地』『大陸短歌』『錨地』『廟』の細目を附した。

キーワード・青島 日中戦争 日本語文学 『山東文化』 青島文化聯盟

はじめに

日中戦争期の青島には、日本人による文化団体が多数存在し、活動していた。特に、俳句はその歴史も古く、活発な活動が展開されていた。たとえば、青島で最も古いとされる俳誌『北支俳陣』を創刊した本荘冬果は、改造社の『俳句研究』に掲載された「大東亜俳句圏 青島」を以下のように書き起こしている。⁵⁵⁾

山東半島の一寒漁村に過ぎなかつた青島が、独逸に依つて初めて都市への発足を開始したのが明治三十二年頃、それから歐洲大戦の大正三年であるから、之れを契機に我が俳諧の種も茲に始めて蒔かれたと見てよからう。何となれば日本人が多少集まれば、何時如何なる辺境に於ても、句座の一つも開かれるであらう事は容易に領けるからである。〔傍線戸塚、以後同〕

本荘がいうように、多少の人数が集まりさえすれば簡単に句座をつくることができるのが俳句の一つの特性といえよう。そこからコミュニティが生まれ、また、外地は特に移動が多いことから、ネットワークが広がっていく。

青島文芸界では、俳句以外にも様々な文学・文化団体がつくれ、相互に交流をもっていた。また、近隣にある済南や北京・天津、また日本内地との交流もあった。しかし、当時の青島文芸界を知ることができる資料は極めて少なく、全貌を掴むことは難しい。

本稿では、現在までの調査で入手できた現地発行の資料をもとに、その一斑を紹介したい。対象となるのは、三つの日本語雑誌、俳誌『基地』、歌誌『大陸短歌』、詩誌『錨地』である。また、執筆者に重なりがある済南の文芸誌『廟』（日文と華文）も併せて取り上げる。しかしながら後に述べるように未確認の号が極めて多く、その雑誌の全容を知ることが困難である。そのため、同じく青島で発行されていた雑誌『山東文化』掲載の記述を適宜参照しつつ、欠落した部分を補いたい。

一 青島文化聯盟と『山東文化』

『山東文化』は「山東文化協会」の機関誌として、昭和十五年（一九四〇年）七月二十八日に創刊された⁵⁶⁾。発行兼編輯人は地久武雄、発行所は「青島市大学路五二号」「山東文化協会」であった。続く第二号は、同年九月二五日発行、「発行人 村地卓爾／編輯人 瀬戸村伸一」、発行所は同じである。ちなみに村地は、第一巻第一号及び第二号の奥付左頁にある「山東文化協会・組織機構」に「会長」と記されている。

第三巻第一号（一九四二年二月二五日発行）から発行所が「青島文化聯盟」に変わっている。発行人は村地卓爾だが、編輯兼印刷人の国分友喜は、創刊号にも第二号にも執筆しておらず、「山東文化協会・組織機構」にも名前がない。第一巻第二号以降第三巻まで現物確認ができず未見であるが、第一巻第一号及び第二号では研究論文が掲載される等、全体的に硬い雑誌であるのに対し、第三巻以降は詩・短歌・俳句・川柳・小説等が掲載されるいわゆ

る文芸誌であり、まったく別の雑誌となっている。

この第三巻第一号は、実質「青島文化聯盟」発足特輯の観を呈しており、国分友喜（常任理事）が「青島文化聯盟発足まで」という文を寄せている。雑誌『山東文化』の再編、そして、青島における文化統合の過程がよくわかるので、少し長いがその内容を紹介したい。

「山東文化協会」は「在青日華文化人を糾合して」「昭和十四年十二月十六日」に発足した。「この協会結成に最も力を致した知久武雄氏が主宰する亜東文化学会」、「日華経済研究会」、「大陸文化協会」が参加した。「日本側約百五十名、中国側七十名、合計二百二十名の会員を擁し」、「機関誌『山東文化』は、会結成後四月にして十五年三月（一九四五年）にその創刊号を発行するに至った」。

その後、「篤学の士のみによる極めて高度な研究グループとしての傾向に移行していった」が、昭和一六年に入り、「真に地方的地盤に根を下ろした健全・強力なる文化創造への前進」が要望されるようになった。「二月に入り、山東文化協会事業計画及び予算立案の席上、当会をして、真に文化綜合の団体たらしむべく、何よりも先づ既成文化グループとの密接な連繋、或ひは、強力なる統合を期さんとする案が提出され」、「詩、短歌、俳句、川柳、美術、音楽、写真、経済、児童、宗教、等その他の団体」の賛意を得て、それらを統合する新団体結成へと動き出した。また、当時青島には中国人の文化団体がなかったため、「四月三十日中国側文化団体結成準備委員を詮衡委嘱し、それらの委員によつて詩学、地史、歌曲、戯劇等々の研究会結成を急ぐこととなつた」。さらに「篆刻、絵画、書法等の研究会も設立」し、新団体に合流

することとなった。国分は続けて以下のように述べている。「日華協力のもと興亜の新文化確立を目指して同一歩調をとる事となつたのである」。

かくして新団体、すなわち「青島文化聯盟」が誕生した。国分は、「茲にその綜合機関誌としての『山東文化』続刊の運びともなり、新しい編輯陣容のもとに大東亜文化建設への柱石たらしむとする熱意を漲がらして発足するは、同慶の至り」と述べており、『山東文化』が青島文化聯盟の機関誌として「続刊」したと述べている。

国分の文章は以上であるが、ただ、同号所載の「青島文化聯盟日誌」をみると、「綜合雑誌刊行の可否について」（九月十五日）が議論されていたり、また、「一、文聯機関誌刊行について協議／＼1. 名称、山東文化（但し当分）」（十一月十七日）とあることから、機関誌発行の可否自体も議論されていたし、また、既にあった『山東文化』の「続刊」という形で発行することが満場一致で決定されたわけではないこともわかる。しかし、実際には、青島文化聯盟は『山東文化』の名称で第五卷第三号（一九四四年八月三〇日）まで発行を続けた。その後の刊行は不明である。

以上のように、青島の文学団体、文芸誌の動きは「青島文化聯盟」の結成とその後の活動に密接にかかわっているといえるだろう。そして、この第五卷第三号の「編輯後記」に次のようにある。

▽：前々号予告の通り、時は「基地」「大陸短歌」「錨地」の単独発行を許されなくなつた。随つてこれら同人の作品はすべて本誌に統合発表することになつた。編輯の都合上発表様

式に兎角の不満はあらうが、今はそれを云ふべき時でない、一意文奉精神に基き奮つて投稿されたい。

以上から、「基地」「大陸短歌」「錨地」が廃刊になったこと、『山東文化』第五卷第三号に統合されたことがわかる。

それでは、次章から、各雑誌ごとに紹介していきたい。

二 『基地』

『基地』は青島で創刊された俳誌である。¹⁰⁾

『山東文化』所載の田賀健一郎「青島文芸界俯瞰図(上)」によれば、『基地』創刊号は昭和十五年(一九四〇年)八月に刊行されたとある。また、「五号を〔中略〕刊行して、昭和十六年を迎へた」ともある。

前掲『俳文学大辞典 普及版』にも「基地」の項目が立てられている。

俳誌。昭和十五年(一九四〇)・七、中国青島^{チンタオ}で創刊。隔月刊。昭和十五年、山東毎日新聞に入社した幡谷東吾^{はたやとうご}が、『北支俳陣』のメンバーを引き継ぎ、青島在住の青木しげるらを補佐として創刊。北京の成紀俳句会と呼応して大陸俳句の開拓運動を展開した。昭和十九年、通巻二二号で終刊。¹¹⁾

『俳文学大辞典』は創刊を七月としており、田賀の記述とは異なる。また、「隔月刊」とあるが、田賀は「五号を〔中略〕刊行

して、昭和十六年を迎へた」と述べており、第二号奥付にも「毎月一回発行」と記されている。『山東文化』の「文化聯盟日誌」を見ても、毎月刊行されていた時期もあり、実際の発行状況は不明である。

終刊号の発行月であるが、『山東文化』第五卷第二号(一九四四年八月二〇日発行)の「文化聯盟日誌」によれば、一九四四年六月三〇日に刊行されたとあり、七月、八月は発行されていない。先に述べたように、八月には『山東文化』第五卷第三号に統合されているので、この六月三〇日が終刊号であると推定される。『俳文学大辞典』と「文化聯盟日誌」の双方に誤りがなければ、一九四四年六月三〇日発行の号が、第二二号であり、『基地』終刊号ということになるだろう。

第二号奥付によれば、「昭和十五年八月十六日印刷納本／昭和十五年八月十八日発行／非売品(毎月一回発行)」とあり、「編輯兼／発行兼／印刷人」は「奥平誠」となっている。発行は「基地発行所／青島市臨清路三十五号／日本婦人病院内電話②四一五五番」であり、奥平誠と同じ住所である。

前掲「青島文芸界俯瞰図(上)」に『創刊の言葉』が紹介されているので、以下その全文を引用する。

『創刊の言葉』

基地は、当面の目的として、青島俳句会並びに山東毎日新聞俳壇に拠る北支在住の俳句作家の総合的発表機関として誕生したものである。

従つて、俳句を得つつひたすらに真面目な生活を営まうと

する以外には主義主張とてなく、あくまで白紙である。

基地を構成する個々の中には、既に一家を成したものの、又は成しつつあるもの、新進気鋭なるもの、全く初心なるもの等々文字通り多士濟々である。

これらが、唯一なるものに向つて、おのづからの秩序を形成しつつたむきに前進せんとしてゐる。

基地に立つもののはかり知れぬ飛躍を私達は信じ合つてゐる。一瞬の後に航路が変へられたとしても、必ずや戻つて来るであらうところの基地を、より正しく、より確固たるものとしなくてはならぬ。

顧りみすることの赦されぬ基地に立つて、私達はたつた一つの目的のために、自爆をも敢て辞せぬ決意を抱いてゐる。

田賀は続けて「私は基地に拠る人達によつて、大陸文学に雄渾なひとつの金字塔が、うち樹てられつつあることを、喜ぶものである」と述べ、さらに創刊号の内容について以下のようにまとめている。

いま基地創刊号の個々の作品に就て書く余裕を持たないが、幡谷梢閑居の「私の立場」からもその方向が窺へるし、奥平まこと、小林如風、室井波郷、武下有平、新懇道夫らの作品集、本荘冬果選の「吃水線」並びに幡谷梢閑居選の多数の基地作品からも、盛りあがる逞しさと熾烈な意欲があふれているのを感じとる事が出来る。

ここに書かれている「幡谷梢閑居」とは、先に引いた『俳文学大辞典』に出てくる「幡谷東吾」と同じ人物である。詩誌『錨地』では「幡谷東吾」、本名の「幡谷藤吾」を併用している。青島文化聯盟の結成にも積極的に関与し、『山東文化』で編輯に関わった。『山東文化』の「青島文化聯盟日誌」では、俳人としての活動は「幡谷梢閑居」、それ以外は「幡谷藤吾」で記録されていることが多い。『山東毎日新聞』文芸欄を担当し、『山東毎日新聞』が『青島興亜新報』に統合されると『青島興亜新報』に移った¹¹⁰⁾。

続けて、『基地』同人からの言を紹介する。はじめに引用した本荘冬果「大東亜俳句圏 青島」で、青島俳句界の草創期からの流れを紹介したあと、次のように述べる。

目下人口五十七万内日本人四万の躍進大青島市を現出し従つて内地新進俳人の大陸進出も目覚ましく、恰も時局の要請に添ひ、青島文化聯盟が結成せられ我が俳壇も其の傘下に大同団結したのであつた。其の内訳はホトトギス会・天の川会・さいかち句会・霧笛句会・蛍雪句会等であり、幡谷梢閑居氏青木しげる氏等により新に俳誌「基地」が刊行されてゐる。その他散在する職域団体の小句会或は近郊紡績地帯の句会など合はせ、洵に百花燎乱、青島文芸界の大宗と謂ふを得べく、之等が和氣藹々大挙して白衣の勇士の慰問句会に赴く態などうたゝ今昔の感に堪へないものがある。句風も清新澁刺として各派多少の色合があるとは謂へ総べて「良いものは良い」の建前の下に、国民詩としての大陸詩建設と謂ふ事に歩調がびつたり合つた総進軍である。

最後に、『基地』第二号に掲載された句から一部紹介する。

東洋の雨あをあと兵還る

幡谷梢閑居

パラフィン紙火がつき詩論などむらさき

同

苦力の荷、虹を越へんとしてのろき

奥平まこと

三 『大陸短歌』

『大陸短歌』は青島発行の歌誌である³¹⁰。創刊号は、前掲「青島文芸界俯瞰図(上)」によれば、一九四〇年一〇月に刊行されており、同年中に三号まで発行されている。

はじめに述べたように、『大陸短歌』は、『基地』『錨地』とともに、『山東文化』第五卷第三号(一九四四年八月三〇日発行)に統合された。しかし、実際の終刊の時期は不明である。『山東文化』第五卷第二号の「文化聯盟日誌」は、一九四四年一月から七月末までの雑誌発行を含めた記録が掲載されているが、大陸短歌会の記録はあるものの『大陸短歌』発行については記していない。『山東文化』は第四卷第二号から第五卷第一号まで未見であり、その間の文聯日誌に掲載されたと想定される一九四三年二月一日から同年末までの活動については不明であるが、この間に最後の号が発行された可能性もある。なお、『山東文化』第四卷第一号の「文聯日誌」に「▼十二月二十三日 大陸短歌十二月号発行」とあり、一九四二年に一二月号が発行されていたことがわかる。

第三卷第三号の奥付によると、「発行所／発行者」は「村地卓爾」、

住所は「青島市曲阜路十二号／青島文化聯盟大陸短歌会」となっている。印刷者は、「村松寛治」、住所は「青島無棣路五号」。編輯者は「辰野徳夫」、「青島市鉄山路四号」である。「編輯所／事務所」は「大陸短歌会」で、辰野と同じ住所である。また、「大陸短歌後援会」も記されており、住所が印刷人松村と同住所で「青島無棣路五号村松医院内」となっている。

『大陸短歌』創刊までの青島短歌界の流れを、前掲の田賀「青島文芸界俯瞰図(上)」にしたがって要約すると以下のようになる。

事変前は、辰野徳夫、谷村今子らが短歌雑誌『防風林』を出していたが、事変後は自然消滅した。一九三八年「九月には、辰野徳夫、正木純、稲垣正、川原武雄、嘉村文雄、重富寿満子らが中心となり、青島短歌会を結成した外、山本迷村、岡本秋子、大西康弘、宗像節子、有吉美野留、志於寺雅人、細川白鷗らの短歌人が、山東毎日新聞で活躍した」。

このように、『山東毎日新聞』の文芸欄が大きな役割を果たす一方、青島短歌会は謄写による『青港』を刊行した。やがて「山東毎日新聞歌壇の選者と、青島短歌会指導に努力した辰野徳夫を主宰者に推し、同谷村今子、及び青島短歌会の幹部として活躍した稲垣正、正木純、嘉村文雄、大西康弘、松原三夫勝山紫夕、岡林秋子、上村紫蘭らが中心となり、新たに山本迷村、鎮日登州郎、松村如洋、田中政蔵、村上昇平、高木量平らの幹部を得て、歌誌『大陸短歌』を刊行することになり、十月創刊をみた」。

そして、田賀は続けて創刊号の辰野徳夫の言を引いている。

大陸短歌は常に謙讓に新生大陸に於ける我々の生活態度を

表現し、時代と共に進展する我々の生活精神を象徴し、新体制に即応した我々のあこがれと、現実とが諸種の面貌をとつて示現されるであらう。

我々は、この道に、我々の精神を錬成し、つねに自己を空しくして、自己の精神のありどに観入し、没我奉公の精神に帰一せしめようと祈念する。

さらに田賀は、創刊号の作品に「大陸に於ける新しい意欲」と「遅しいリリズム」を指摘している。

大陸短歌会は、中国各地や台湾に支部を持っていた。以下は第三卷第三号に記されているその一覧である。上海、台湾以外は華北地域となっている。

大陸短歌会支部

滄口大陸短歌会

滄口站田中方

濟南大陸短歌会

濟南市四大馬路緯四路松尾洋行村上方

上海大陸短歌会

上海海格路同文書院大学内大木方

徳県大陸短歌会

徳州日本領事館氣附徳永方

石門大陸短歌会

河北省石門市煤市衛五谷口方

北京大陸短歌会

北京市内三区水瀨胡同十二新民報支社内

芝罘大陸短歌会

山東省芝罘市長田方

淄川大陸短歌会

山東省淄川炭礦魯大公司生喜方

台灣大陸短歌会

基隆市寿町一ノ二井手方

最後に、確認できた最初の号である第三卷第三号より、短歌の一部を紹介する。

歴史

辰野徳夫

世界地図掲かりし壁にそふベッド太平洋を見つつ睡らむ

かつてわがオーガスタのそばを泳ぎ見し米兵の顔を忘れず

長男体育賞をいただく

谷村今子

大君のみたてとならん願もてきたへしからだ汝は尊し

四 『錨地』

『錨地』は、青島発行の詩誌である。

創刊号奥付によれば「昭和十七年六月二十五日印刷納本／昭和十七年六月二十六日発行」とある。細目にあげた第二卷第一号以降については、『山東文化』『文化聯盟日誌』に記載があるが、第五卷第二号の同欄二月二〇日に「詩部会同人雑誌『錨地』刊行」

とあり、一九四四年二月二〇日に刊行されていたことがわかる。第五卷第三号の同欄に記載がないことから、一九四四年二月二〇日が事実上の終刊号となった可能性がある。

創刊号の奥付を再び見ると、「編輯者 山口春三／青島市曲阜路十二号／青島文化連盟内／青島詩人倶楽部」「印刷所／青島新民報印刷局／青島奉天路二一四号」「印刷者 国分友喜 青島市曲阜路十二号／青島文化連盟」「発行者 村地卓爾 青島市曲阜路十二号／青島文化連盟／電話二一〇四六」とあり、値段は一円とある。青島文化聯盟結成後の創刊であるため、印刷者・発行者が聯盟の役員となっている。編輯者「山口春三」の名は同人一覧にも執筆者にも見当たらず、不明である。

『錨地』創刊をめぐる、同人の「石垣」が創刊号の編輯後記で記しているが、彼が『山東文化』第三卷第四号に書いた「青島詩人倶楽部日誌」[※]の記述が分かりやすいため、以下に引用する。

六月二十六日、機関誌「錨地」創刊さる。昨秋、青島詩人倶楽部結成以来、待望久しき機関誌も、現地当局の理解ある取計ひにより、その刊行を許可され、いよ／＼発刊されたのである。

これは直ちに、われ／＼詩人倶楽部をして、現地大陸に於ける文化運動に、積極的な活動を命ぜられたことなのである。

いまやわれ／＼は、旧来の理念や思惟により単なる趣味的な作品発表機関などと思ふことなく、大いなる愛情により育まれ来たつた祖国の血の伝統の上に立ちただ／＼不断の内省と、孜々たる実力の涵養と、跳躍的な創意により、大東亜文

化圏の一翼、現地大陸に実在せる自らの行動を、詩精神の上に昂揚し、機関誌「錨地」をして、有意義なる活動を展開さすべきである。

七月四日、「錨地」創刊号合評会が、午後八時より、文化聯盟会議室にて開かれた。〔中略〕なお、次号よりは季刊の予定。〔中略〕
(石垣保)

創刊号の「青島詩人倶楽部 同人住所録」によれば、編輯同人は、石垣保、幡谷藤吾、二騎仙太郎、緒方春樹、田賀健一郎、山田紅葉、安田伝吉の七名、すべて青島市在住である。その他の同人で青島市在住者は、岩淵忠三、新懇道夫、星湖村、遠野幸郎、小川さすが、尾崎朝子、柏木光子、武田敏治、田中讓（正しくは「讓」か）、難波素焼鸞、白井千葉之輔、古川かすみ、文月狂子、小北八百次郎、東馨子、佐和田唯夫、北門百祥、美濃崎敏治、望月利子、森川三郎、以上二〇名、青島以外は、齊林二（坊子）、大石正己[※]（天津）、大村皓一（博山）、大谷菊男（北京）、織田旗男（濟南）、松本美之利（張店）、福田宝作（徐州）、藤原聡次（天津）、飛鳥川光亮（濟南）、関口節（北京）の一〇名である。

著名な執筆者としては藤原定がおり、第一卷第二号に「詩の信仰性について」、第二卷第一号扉に詩を寄せている。

五 『廟』

『廟』は、濟南で創刊された詩を中心とした文芸誌である。[※]興亜総本部調査部編『大東亜地域新聞雑誌総攬』（一九四五年）

によれば、創刊は昭和一四年一月一日、発行人は本荘光年、年一〇回発行、発行部数三〇〇部、言語は「日・華」と記されている。ちなみに、本荘は、『基地』第二号の「新入会員紹介」に「済南 本荘光年」と記されている。

第二冊奥付によれば「昭和十六年十二月十五日印刷納本／昭和十六年十二月二十日発行」とある。また、発行者は「本荘光年」、住所は「済南四馬路緯八路二八七」である。編輯者は「由井博」、住所は「済南二馬路緯三路西「愛屋」、発行所、「日華山東文芸研究会／廟発行所」、住所は「由井博」と同様である。また、非売品とある。終刊の時期は不明であるが、前掲『大東亜地域新聞雑誌総攬』に掲載されていることから、現在確認済みの第五冊（一九四三年一月一日）以降も出ていた可能性がある。

第二冊の「詩誌「廟」規約」に、「一、「廟」ハ詩ヲ中心トシ訳詩・創作・評論・随筆等同人作品ノ発表機関誌トシ山東文化ノ宣揚ニ勉ムルモノトス」とあるように、詩が中心であり、中国人詩人による中国語詩も少なくない。また、本荘冬果等が俳句を掲載している。その他、評論も毎号掲載されており、特に、第二、四、五冊には飛鳥川光亮が巻頭言を書いている。第二冊の巻頭言「世界変革と興亜文学の方光」には、飛鳥川が考える、文学のあるべき姿と詩人の役割が明確に打ち出されている。

今こそ全東洋の詩人達は固き鉄鎖の一環となつて、全アジア民族開放の為に蹶起すべき秋である。

真のアジア民族開放運動は、人間の解放を根本理念とする文学精神の高揚に拠つてのみ完遂され得るであらふ。而して、

その人間解放の純一無垢なる根本理念は、肇国以来不動不變たる八紘一宇の日本精神の中にのみ見出され得る。

それは儒教を併せ、印度哲学を呑み、ヨーロッパの近代文化を享け、遠く回教喇嘛の文化を汲み、トーテムの情熱を解し、滅びゆく北方民族の挽歌を憐み、かくて文化伝統不拔の高峰を巔として大東亜の一角に聳立せしめた。そして今後それは、大和民族のみの高峰であつてはならないのだ。前アジア民族を振起せしめ、全世界の人類に汎平和的社会生活を享受せしめる努力をば遂行せねばならない。

かゝる作品以前の心構えが全東洋の作家達に確固として樹立された時、始めて真に将来の興亜文学は胎生するのである。

嘗て詩人は時代の予言者であると云はれた。然し、現在の如く驚天動地の急転極まりなき国際社会情勢裡に在つては、詩人は時代の探照燈であつて十分である。

第二冊に記された同人一覧は以下の通りである。飛鳥川光亮、伊吹策、織田旗男、加藤守人、坂下十九時、田賀市郎、高木量平、中山勝秀、原順一、和久井登、夏烘秋、王鉄民、楊仁、張亜生、馮一水、李石投。

第五冊には武者小路実篤が済南に來た時に寄稿した「大きな使命」が掲載されている。また、同人の馮中一による中国語訳が併記されている。

なお、北京大学所蔵の『大陸短歌』の閲覧については、北京外国語大学・秦剛教授にご協力いただきました。厚く御礼御礼申し

上げます。

- i 『北支俳人』については、『俳文学大事典』（角川学芸出版、二〇〇八年一月、八三八頁）で立項されており、以下のように説明されている。「俳誌。昭和一〇年（一九三五）・五、中国山東省で発行。隔月刊。青島を中心とする在留邦人、本荘冬果・三條羽村らによって運営され、次第に新興俳句色を濃くしたが、昭和一一年八月、通巻一三号で休刊。会員は、昭和一五年の『基地』創刊に全面的に参加協力した。」執筆者は小倉緑村である。
- ii 『俳句研究』第一〇巻六号、一九四三年六月、四六一―四七頁。「大東亜俳句圏」は、外地の俳句を紹介するコーナーである。
- iii 『山東文化』の所蔵状況は以下の通りである。第一巻第一号は愛知大学、第二号は同大を含め日本国内の複数の大学が所蔵している。第三巻第一号から第四号、第四巻第一号と第五巻第二号及び第三号は国立国会図書館デジタルコレクションに収録されている。第一巻第三号、第二巻第一号は、北京国家図書館に所蔵されているはずであるが、二〇一九年八月の調査では閲覧不可であった。
- iv 神奈川近代文学館が第二号を所蔵している。その他の所蔵は管見の限りない。
- v 第三巻第一号、昭和一七年二月二五日発行。なお、この後続編が掲載された形跡はない。なお、田賀健一郎は、『錨地』『廟』同人であり、『山東文化』にもしばしば執筆している。執筆名・同人一覧ともに、「田賀健一郎」「田賀市郎」が混在している。
- vi 二〇八頁。執筆者は小倉緑村。
- vii 『青島興亜新報』は興亜総本部調査部編『大東亜地域新聞雑誌総攬』（一九四五年）によれば、一九四二年三月創刊。発行部数は一、二〇〇〇部とある。華北地域の新聞は『東亜新報』に統合されたが、海軍が強い青島は『東亜新報』に統合されなかった。
- viii 北京国家図書館が第三巻三号（昭和一七年三月一五日発行）、第三巻第四号（同年四月一五日発行）、第三巻第六号、（同年一〇月一五日発行）を所蔵している。また、北京国家図書館が、第三巻三号と第四号、及び国家図書館欠号の第三巻第五号（同年五月一五日発行）を所蔵している。その他の号の現物は現在の調査では見つかっていない。
- ix 神奈川近代文学館が第一巻第一号（一九四二年六月二六日）、第二号（一九四二年九月二六日）、第二巻第一号（一九四三年四月二六日）を所蔵している。その他の所蔵は管見の限りない。
- x 六八―六九頁。
- xi 第一巻第二号、第二巻第一号の同欄では「大石正巳」とある。
- xii 神奈川近代文学館が第二冊（一九四二年二月一〇日）、第三冊（一九四二年五月一五日）、第四冊（一九四三年四月一日）、第五冊（一九四三年一月一日）を所蔵している。その他の所蔵は管見の限りない。

『基地』『大陸短歌』『錨地』『廟』細目

- 一、以下は『基地』『大陸短歌』『錨地』『廟』の細目である。『基地』『錨地』『廟』は、神奈川近代文学館蔵、『大陸短歌』は北京国家図書館、北京大学図書館のものを参照した。
- 一、書誌は各号の始めに刊行年月日、号数の順に記した。
- 一、細目は本文に即して採り、目次表題と異なる著しいものに限り*を付し、各号末に注記した。中段が著者名、下段に掲載頁を記した。
- 一、仮名遣いは原文のままとし、漢字は原則的に新字に改めた。また、数字や記号などは原文のままとし、あえて統一はしなかった。
- 一、本文の表記のほか、各号の巻頭目次及び本文内容を参照して補訂した。
- 一、「」内は補校訂・注記であり、本文には表記されていないものである。
- 一、誌上に設けられた各欄の名称は〈〉内に記した。
- 一、目次や本文に分類内容が記されている場合は〈〉内に記した。
- 一、著者名または発言者の肩書や出身地が記されている場合は（ ）内に記した。
- 一、その他、留意すべき項目には*を付し、各号末に注記した。

『基地』

昭和一五年八月一八日発行（一卷二号）*1

青き旗「俳句・五句」	矢川友三
生活俳句小論	奥平まこと
〈九月作品〉	
東洋の雨「俳句・一三句」	幡谷梢閑居
興亜記念日「俳句・五句」	高井対月
とある海浜ホテル「俳句・八句」	海平四郎
夕四時「俳句・三句」	小林如風
迷蝶集「俳句・四句」	武下有平
身辺描写「俳句・五句」	小沼潮路
夏の内蒙三題「随筆」	大井赫水
青島「俳句・八句」	小早川秋声
〈吃水線〉小林如風選*2	麻生豊・画
句の路「随筆」	室井波郷
二兔を追ふ話「随筆」	小林如風
新会員紹介	福富青陽
〈成層圏〉	
夏花抄「俳句・五句」	福富青陽
病床吟「俳句・五句」	吉村一朗
“基地”創刊記念小会*3	
新攀道夫 蔵前貢迷 藤村辰雄 室井波郷 幡谷梢	
閑居 高井対月 小林如風 福富青陽 鷺尾芝郎	

吉永素人 青木しげる 奥平まこと 榎木野生長
近江卯甲 15

ふるさとの記「随筆」

室井波郷 16-17

新会員紹介

17

青島俳句会第三回例会*4

幡谷梢閑居 高井対月 武下有平 奥平まこと

福富青陽 室井波郷 近江卯甲 浅井昭三郎

菅野青塔 鷺尾芝郎 片桐妥女 志於寺雅人 谷口十郎

寺門幽泉 榎木野生長 指宿いね女 藏前貢迷

花野千代 岡村七赤 山上美砂 後藤茂 矢島蘇牛

小池無聊 津氏鼓涛 佐野鏐子 志賀落穂 西木山春帆

空閑竜門 谷口芳子 四元菊枝 18-19

〈基地作品〉 幡谷梢閑居選

20-29

基地作品選後雑感

梢閑居 30-31

「基地」・主宰者・賛助員(同人)・維持同人

32

原稿募集

[33]

旅順戦蹟を巡る「俳句・五句」

猪間八蹄「裏表紙」

*1 発行日は八月であるが、表紙に「No.2 九月」、扉に「九月第二号」とある。

*2 二三頁の原稿募集によれば「十月号」の選者は「武下有平」、

「十一月号」は「田原白父」である。

*3 「昭和十五年七月十七日夕七時より於・太平洋路・グラント・

ホテル西館」とあり。出席者の集合写真あり。それぞれ一〜

三句紹介。

三句紹介。

*4 「六月三十日・午後一時 於第一公園・公園飯店」「同好十
五名の出席を得、他に投句者十二名」とあり。

『大陸短歌』

昭和一七年三月一五日発行(三巻三号)

〈作品〉

歴史「七首」 辰野徳夫(青島) 2

長男体育賞をいただく「二首、他六首」 谷村今子 23

星港湾陥落「六首」 田中政蔵(滄口) 3

星港陥落の日「一〇首」 芝一平(青島) 34

病舎の朝「七首」 押川文子(青島) 4

冬の歌「五首」 坂西きみ(青島) 4

南方の凱歌「六首」 有吉園枝(青島) 5

故郷「一〇首」 勝山紫夕(東京) 5

前月作品私抄 岡林秋子選 2

二月例会 合評

松原三夫(記) 阿部良介 上村紫蘭 辰野徳夫

稲垣正 押川文子 3-5,7

万葉女流歌人の研究(三)——大伯皇女—— 上村紫蘭 6,7

第二回陸海軍献納愛国短歌募集「広告」 大日本歌人会 7

〈大陸短歌集(一)〉

石炭荷役「六首」 渡辺哲(青島) 8

小包「五首」 山口幾治(青島) 8

「無題・十二首」					
転居〔三首〕					
前月作品私抄評					
〈大陸短歌集(二)〉					
「無題・三首」					
「無題・九首」					
「無題・四首、他六首」					
「無題・四首」					
「無題・四首」					
「無題・七首」					
「無題・三首」					
「無題・五首」					
「無題・二首」					
〈作品〉					
雑詠〔六首〕					
時は逝く〔一一首〕					
新嘉坡陥落前後〔一五首〕					
愛恋の譜〔一一首〕					
昭和十六年十二月八日〔六首〕					
病床の歌〔九首〕					
きさらぎ半ば〔八首〕					
海閣〔六首、他五首〕					
大陸短歌集(二)を評す					
〈会報〉					
〈新会員〉					
河内登代(北京)	8-9				
坂野三代子(博山)	9				
辰野徳夫	8-9				
小林高(北支派遣軍)	10				
長田葉堂(芝罘)	10				
石坂美津江(青島)	10				
松橋美恵(青島)	10				
中西広子(滄口)	11				
広川利子(青島)	11				
有長美代子(青島)	11				
宇田川明雄(神戸)	11				
野口栄子(浦和)	11				
稲垣正(青島)	12				
森田光子(青島)	12-13				
岡林秋子(青島)	13				
上村紫蘭(青島)	14				
椎名紀(淄川)	14-15				
村上昇平(濟南)	15				
宗像節子(青島)	15-16				
松原三夫	16				
辰野徳夫	12-13				
大村藩〔九首〕					
「無題・五首」					
病床歌〔四首〕					
「無題・一〇首」					
山口郁二(青島)	8				
渡辺哲(青島)	8-9				
中西広子(滄口)	9				
河内登代(北京)	9				
〈後記〉					
〈大陸短歌会支部〉					
〈大陸短歌会清規其他〉					
昭和一七年四月一五日発行(三卷四号)					
〈作品〉					
蒙疆の冬〔一〇首、他二首〕					
病室の窓〔四首、他二首〕					
勝鬨〔六首〕					
秋拾遺〔七首〕					
雛の夜〔九首、他四首〕					
友よ、南国へ行く〔八首〕					
嗚呼古野少佐〔六首〕					
つはもの〔五首〕					
特別攻撃隊讃歌〔五首〕					
前月作品私抄					
前月作品評					
大陸短歌一人一首選評					
釈迢空氏の歌——短歌研究三月号より					
〈大陸短歌集(一)〉					
大西康弘	7				
谷村今子	5-7				
稲垣正	3-4				
岡林秋子選	2				
大西康弘(青島)	6				
押川文子(青島)	6				
有吉園枝(青島)	5-6				
芝一平(青島)	5				
上村紫蘭(青島)	4-5				
岡林秋子(青島)	3-4				
田中政蔵(滄口)	3				
谷村今子(青島)	2-3				
辰野徳夫(青島)	2				
辰野 松原	15				
大村藩	16				
[17]					

田中政蔵氏歓迎歌会席詠	8-9	有吉美野留(青島)	19-20
万葉集女流歌人の研究——磐姫皇后——	上村紫蘭	松原三夫(青島)	20
〈大陸短歌集(二)〉	10-11	滄口大陸短歌会(第一回)詠草	16-17
芝罘行「六首」	長田葉堂(芝罘)	〈会報〉	17-18
「無題・一〇首」	田中政一(暁部隊)	〈新入会員〉	18
「無題・一〇首」	有馬民子(茅ヶ崎)	〈後記〉	19
姉逝きて「四首」	坂西孝子(青島)	〈大陸短歌会支部〉	20
「無題・二首、他二首」	田実チズ子(青島)	〈大陸短歌会清規其他〉	[21]
「無題・五首」	中川喜代子(青島)	昭和一七年五月一五日発行(三巻五号)	
恩師抗日分子の夜襲に会はる「五首、他二首」	松橋美恵(青島)	〈作品〉	
「無題・六首」	堤奈賀子(北京)	歴史「五首、その他三首」	辰野徳夫(青島) 2
「無題・四首」	中山イチ子(青島)	北の海「六首」	勝山紫夕(東京) 2-3
「無題・六首」	大田真喜子(青島)	捷報「五首、他六首」	田中政蔵(滄口) 3-4
はじめの青島「三首」	下田伊代(淄川)	回想「八首」	佐々木落紅 3-4
「白塔」を読む	坂西孝子	燈明「一三首」	坂西きみ(青島) 4-5
大陸短歌会三月例会	上村紫蘭・記	「無題・五首」	森田光子(青島) 5
〈作品〉	14-15	猫の宿「一〇首」	上村紫蘭(青島) 5-6
読「すめらみくに」	稲垣正(青島)	「無題・六首」	有吉園枝(青島) 6
「無題・一〇首」	正木純(青島)	蒙古嵐「三首」	大西康弘(青島) 6
感激の朝「七首」	森田光子(青島)	浮山登山「二首」	稲垣正(青島) 6
ますらを「六首、他四首」	瀬上さと野(四方)	前月作品私抄	岡林秋子 2
病床の歌(二)「六首」	村上昇平(濟南)	先月作品鑑賞	稲垣正 3-5
挽歌「六首」	坂西きみ(青島)	大陸短歌集評	松原三夫 5-6, 9-11
シクラメン「一一首」	宗像節子(青島)		

万葉集女流歌人の研究 大伴坂上娘女(続) 上村紫蘭	7-8				
〈大陸短歌集(一)〉					
「無題・七首」	田口政一(暁部隊)	9	「無題・三首」	松本淑子(青島)	19
「無題・三首、他三首」	山口郁二(青島)	9-10	「無題・九首」	有吉美野留(青島)	19-20
「無題・六首」	中西広子(滄口)	10	花の無い花瓶「三首」	押川文子(青島)	20
「無題・八首」	河内登代(北京)	10-11	問答「五首」	松原三夫(青島)	20
「無題・八首、他五首」	長田葉堂(芝罘)	11	四月歌会報	三夫・記	17-18
両国民対面の理念	稲垣正	12	〈会報〉		18-19
〈大陸短歌集(二)〉			〈新人会員〉		19
「無題・五首」	小林高(北支派遣軍)	13	〈後記〉		19-20
「無題・四首」	田実チズ子(青島)	13	〈大陸短歌会清規其他〉		[21]
「無題・四首」	茜華子(青島)	13			
友を見舞ひて「七首」	恩田一子(青島)	13			
中村大尉の魂に「五首」	石坂美津江(青島)	13-14	昭和一七年一〇月一五日発行(三巻六号)		
「無題・一三首」	有馬民子(茅ヶ崎)	14	〈作品〉		
「無題・七首」	宇田川明雄(神戸)	14	高梁「六首」	辰野徳夫(青島)	2
「無題・五首」	松橋美恵(青島)	14	屋上スケッチ「九首」	谷村今子(青島)	2
「無題・二首、他三首」	野口栄子(浦和)	14	くもの巣「七首」	勝山紫夕(東京)	3
憶良の子等を思ふ歌―万葉集卷五の研究―「対談」	稲垣正 三浦三夫	15-16	アカシヤの花「六首」	田中政蔵(滄口)	3
〈作品〉			「無題・九首」	坂西きみ(青島)	3-4
たゝかひのうた「九首」	富重寿満子(青島)	17	亡兄の霊に「四首、他四首」	宗像節子(青島)	4
春耕「七首」	一ノ瀬清之(岡山)	17-18	松風「七首」	岡林秋子(青島)	5
若草抄「六首」	岡林秋子	18	初秋の歌「七首」	大西康弘(青島)	5
園児にわかれむかへて「一一首」	宗像節子(青島)	18-19	魯東従軍「五首」	稲垣正(青島)	6
			南京「六首」	松原三夫(青島)	6
			さくらの花	稲垣正	2-4
			前月作品私抄	岡林秋子	4-5

前月作品評	阿部良介	5-8		
〈大陸短歌集(一)〉				
「無題・八首」	田口政一(暁部隊)	7	「無題・四首」	三野正夫(滄口)
病舎「一六首」	中西広子(滄口)	7-8	「無題・九首」	西川光枝(滄口)
帰郷詠(其ノ一)「一六首」	山口幾治(青島)	8-9	「無題・九首」	西川光枝(滄口)
拾遺「一五首」	河内登代(北京)	9	「無題・四首」	笠原みさ子(滄口)
万葉集女流歌人の研究——笠女郎——	上村紫蘭	10-11,9	「無題・二首」	三浦年子(青島)
〈大陸短歌集(二)〉			「無題・三首」	大多和恒文(海州)
「無題・四首、他二三首」	田実チズ子(青島)	12	「無題・二首、他一首」	平石泰子(青島)
「無題・五首、他一首」	長田葉堂(芝罘)	12	「無題・四首」	下田伊代子(淄川)
「無題・九首」	有馬民子(茅ヶ崎)	12	「無題・一首」	川根光二郎(濟南)
「無題・五首」	坂西孝子(青島)	12-13	「無題・二首」	寺村光子(普集)
「無題・八首」	宇田川明雄(神戸)	13	「無題・七首」	花田光子(青島)
珊瑚海々戦「二首、他四首」	土生昇(青島)	13	「無題・二首」	高谷千枝子(青島)
「無題・五首」	小林高(北支派遣軍)	13	「無題・四首」	今井延代(愛媛)
村上中佐マニワ戦線に散る「八首、他二首」	松垣幸枝(青島)	13	皇軍を讃へる歌	熊谷喜義(青島)
山西の空(五台县東治鎮にて)「七首」	古沢弥一(太原)	13-14	中西広子(滄口)	岡林秋子「各二首」
「無題・五首」	松橋美恵(青島)	14	〈六月例会公報〉	山口・記
「無題・五首」	石坂美津江(青島)	14	六月例会詠草	岡林秋子
農村の勤勞奉仕に「五首」	山内充子(東京)	14	大陸短歌五月号感銘歌	
「無題・五首」	平石松翠(青島)	14	〈作品〉	
「無題・三首」	茜華子(青島)	14	冬の庭「四首、他四首」	阿部良介
「無題・五首」	徳永昌子(徳県)	14-15	兵士群像「一四首」	上村紫蘭(青島)
			「無題・五首、他七首」	村上昇平(濟南)
			「無題・五首」	森田光子(青島)
			貧者「六首」	松本淑子(青島)

「無題・八首」	一ノ瀬清三(岡山)	21	旗風「詩・他二篇」	石垣保	9-11
南の便り「六首」	押川文子(青島)	21	重工業「詩」	松本美之利	11-12
うり談義	松原三夫	18-20	父「詩・他一篇」	遠野幸郎	12-13
通信(辰野氏宛)	一ノ瀬清三	21	悲歌「詩・四篇」	星湖村	13-14
風蝕は鳴る「一〇首」*1	辰野徳夫	22	皇二十七世紀の凱歌「詩」	難波素焼麿	14
〈芸報〉		22	冬「詩・他一篇」	東馨子	14-15
〈新入会員〉		22	吹雪の夜「詩」	大村皓一*1	15-16
〈大陸短歌会支部〉		22	懸垂旗「詩」	新墾道夫	16
〈大陸短歌会清規其他〉		[23]	朝詣で「詩」	尾崎朝子	17
			知性巨砲「詩」	福田宝作	17-18
			神となる兵——関口一等兵に——「詩」	飛鳥川光亮	18-20
			南に戦ふ友に「詩・他一篇」	大石正己	20-21
			朝の歌「詩」	大谷菊男	22
			青葉の詩「詩」	古川かずみ	22-23
			海の底「詩・他一篇」	美濃崎省三	23
			健康譜「詩」	武田敏治	23-24
			蘇生「詩」	文月狂子	24-25
			戦線齣集「詩」	二騎仙太郎	25
			郷愁「詩」	小北八百次郎	25-26
			母の歌へる「詩」	芥林二	26
			波止場での感傷「詩」	田中穰	27
			夜——青島の詩——「詩」	柏木光子	27-28
			出盧「詩・他一篇」	田賀健一郎*2	28-29
			風俗「詩・二篇」	銀杏寺純	30
			青島詩人倶楽部	同人住所録	31
〈扉〉美について	高村光太郎				
大詔奉戴日の晨「詩」	山田紅果	2-3			
月曜日の午「詩」	織田旗男	4-5			
大きい幹にもたれたら「詩」	弘川利子	5			
葱「詩・他一篇」	緒方春樹	5-6			
冬の行脚「詩」	安田伝吉	6-7			
神々の歴史を護る「詩」	佐和田唯夫	7			
日蝕「詩」	森川さむろ	7-8			
田園風景「詩・二篇」	岩淵忠三	8-9			

〈雑記帳から〉

ある手紙

田賀健一郎 * 2 32

李さんの小盗児

石垣保 32, 33

紺太郎の綴方

二騎仙太郎 33

〈編輯後記〉

石垣 二騎 34

* 1 本文・同人住所録ともに「皓一」。一卷二号、一卷三号ではすべて「皓三」となっている。

* 2 「田賀健一郎」は、『錨地』『廟』『山東文化』に執筆しており、「田賀健一郎」「田賀市郎」の両方を使用している。

昭和一七年九月二六日発行（一卷二号）

〈扉〉「和歌・二首」

日本武尊

詩の信仰性について「評論」

藤原定 2-3

廃墟の通り——公大第五紗廠にて——「詩」

石垣保 4

悲願「詩」

新墾道夫 5

初冬の空「詩」

織田旗男 5-6

若き尼「詩」

遠野幸郎 6-7

秋風の町へ「詩」

大村皓三 7-8

月によせて「詩」

古川かずみ 8

嘆息「詩」

斉林二 8-9

風景回想「詩・他一篇」

二騎仙太郎 9

美意識について「評論」

幡谷東吾 10-13

秋ぐち「詩」

佐和田唯夫 14

起て東亜「詩」

松本美之利 14-15

悲みの途「詩」

北門百祥 15

三等船室にて「詩」

大谷菊男 16

雲「詩」

東馨子 16-17

七月の朝「詩」

岩淵忠三 17

港にて「詩」

森川三郎 18

孤独の歌「詩」

小北八百次郎 18-19

夜の唱「詩」

田賀健一郎 19

詩人のために

新墾道夫 20

体操談義

安田伝吉 20-21

位置の確認

田賀健一郎 21

〈委員の頁 詩欄〉

中村鉄義

荒井石子

大森郷

武田信子

北側信

22-23

詩稿を募る

23

〈編輯後記〉

田賀 24

〈青島詩人倶楽部 同人住所録〉

[25]

昭和一八年四月二六日発行（二巻一号 通巻三号）

〈扉〉純粹「詩」

藤原定

星の章「詩」

田賀市郎 2-3

丘「詩・他一篇」

大村皓三 3-4

濟南府大馬路「詩」

織田旗男 4-5

あたらしき頓當「詩」

安田伝吉 5

自覚と誠実「評論」

田賀市郎 6-7

位置〔詩〕	二騎仙太郎	8	〔25〕
新年〔詩〕	佐和田唯夫	8-9	
離愁〔詩〕	田中穰	9	
初冬〔詩・二篇〕	岩淵忠三	10	
雪ふるよ〔詩・他一篇〕	東馨子	10-11	
落日 田賀市郎君に〔詩・他一篇〕	中野明	11-12	
酔ひ〔詩〕	北門百祥	12-13	
時〔詩〕	斎林二* 1	13	
暈の上〔詩〕	小林富司夫	13-14	
或る夜の昇天記録〔詩〕	清水和仁	14-15	
朝鮮酒幕〔詩〕	小北八百次郎	15-16	
そぞろあるきて〔詩〕	遠野幸郎	16	
点描〔詩〕	岩男那俊	16	
遺骨〔詩・他一篇〕	石垣保	17	
〈雑記帳より〉			
途上雑記	中野明	18	
小さな感想	小林富司夫	18-19	
数	かめ・すやき	19-20	
何と云ふ男、石垣保！	佐和田唯夫	20-21	
紺太郎の綴り方	二騎仙太郎	21	
〈公員作品〉〔詩〕			
研沢民 木山千枝子 持田徳也 福島勝三			
円城章一郎		22-23	
受贈誌小感——地方性の特質	石垣保	22-23	
〈編輯後記〉	石垣 二騎	24	
〈青島詩人倶楽部 同人住所録〉			
* 1 第一巻第一号及び第二号では「斎」ではなく「斉」。			
〔廟〕			
昭和一六年二月二〇日発行(第二冊)			
〈巻頭言〉世界変革と興亜文学の方光	飛鳥川光亮	4-5	
文化運動の基礎理念	大沼英夫	6-9	
詩人無詩	馮一水	10-11	
子供の手紙〔詩〕	坂下十九時	12-13	
我立在泰山之嶺——寄日本青年——〔詩・中国語〕	夏烘秋	14-15	
頬淡紅色に染めて——木遣行事參觀記〔詩〕——	織田旗男	16-17	
海辺〔詩・中国語〕	汶煊	18-19	
叡智〔詩〕	田賀市郎	20	
逃避〔詩・中国語〕	馮一水	21	
ある伝説	高木量平	22-23	
さようなら済南	中山勝秀	23-24	
断想 素描 主張	織田旗男	24-25	
惜余春 詞を訳す	拈華堂主人・訳	26-27	
聖戦〔詩〕	加藤守人	28-29	
血之青年〔詩・中国語〕	夏烘秋	30-31	
南郊外の秘色のなかで〔詩〕	中山勝秀	32-33	

自由的監牢「詩・中国語」	重生	34-35	早春「五句」	工藤去山	14-15
鶴林乃雲「詩」	飛鳥川光亮	36-37	臘梅「五句」	杉山紫峰	15
神と日本人——青野季吉氏訪問記〈隨筆〉	和久井登	38-41	迎春抄「五句」	橘香実	15
基地秋日〈俳句〉「五句」	本荘冬果	41	竜灯会「五句」	山下一郎	15
異土(前章)(一)〈創作〉	伊吹策	42-47	〈特輯・中国新鋭詩人抄〉		
〈編輯後記〉	光亮 旗男	48	思出(日本留学時代ノ一)「詩・日本語」	夏烘秋	16
〈詩誌「廟」規約〉		[49]	給「黃土地帯」作者 詩人織田旗男君		
〈同人〉		[49]	「詩・中国語、他二篇」	夏烘秋	17-19
昭和一七年五月一五日発行(第三冊)			夜明之前「詩・中国語」	馮一水	19
〈卷頭言〉大東亜文芸復興の前夜	飛鳥川光亮	1	黎明之歌「詩・中国語」	蕭丁	20
歴史・国家・民族〈評論〉	大沼英夫	2-4	旅思「詩・中国語」	西曼	20
風の便り—陶啓文君におくる—〈隨筆〉	織田旗男	5-7	你問起我的家郷「詩・中国語」	楚江秋	21
修道院の春〈短歌〉「六首」	高木量平	7	星之眼「詩・中国語」	北蛮	22
〈詩作品〉			霧「詩・中国語」	麿丁	22-23
支那の玩具	坂下十九時	8-9	無題「詩・中国語」	丁星火	23
天への通信——近ける祖父のみたまに捧ぐ——	田賀健一郎	8-9	近詠抄「短歌」	安宝英二	24
東洋の風	飛鳥川光亮	10-11	軍事郵便〈隨筆〉	中山勝秀	24
仙人	中山勝秀	10-11	いのちの大神〈創作〉	久井登	25-28
風船の章「他一篇」	織田旗男	12-13	異郷通信〈創作〉	伊吹策	29-33
〈俳句〉			〈編輯後記〉	あ お*1	34
迎春譜「五句」	藤河立山而	14	〈同人住所録〉		[35]
戦陣句「七句」	坂下十九時	14	〈詩誌「廟」規約〉		[35]

*1 第二冊・四冊の編輯後記を書いた「飛鳥川光亮」と「織田旗男」か。

昭和一八年四月一日発行（第四冊）

〈巻頭言〉 詩人の血潮	飛鳥川光亮	1
海辺「詩」	田賀市郎	2-3
慈雨「詩」	坂下十九時	4-5
你我——獻給一個人 我不願写出她的名子——	関山	4-11
〔詩・中国語〕	加藤守人	6-7
聖戰（其一）「詩」	飛鳥川光亮	8-11
生き抜かん！「詩」	織田旗男	12-13
濟南神社奉祝演武抄「詩・三篇」	馮一水	12-13
詩人的使命「中国語」	寒桑	14-15
中日音楽之溝通「中国語」	天蕪	16
獻給從事山東戲劇界的人們「中国語」	呉楼	17-19
北京文化活動的現況——在日華文芸研究会懇談会講演——	山内敏夫	19
〔中国語〕	夏烘秋	20-21
〈廟會員作品〉 詩二編	田賀市郎	22-25
詩二篇「中国語・横書き」*1	伊吹策	26-30
日記断章	光亮 織田	31-32
三〇の書簡		
〈編輯後記〉		
〈廟同人住所録〉		
〔詩誌「廟」規約〕		

*1 目次タイトルは「月光与劍光」。

昭和一八年一月一日発行（第五冊）

〈巻頭言〉 芸文人の真使命	飛鳥川光亮	1
大きな使命*1	武者小路実篤	2-3
〔詩二篇〕		
桜桃花「中国語・横書き」	夏烘秋	4
幽霊似の人「中国語・横書き」	夏烘秋	5
血の友——寄日本青年（其二）「日本語」	夏烘秋	6
日本の石「詩」	坂下十九時	7
火の唱「詩」	田賀市郎	8-9
到聖孔子の墓「詩・他一篇」	飛鳥川光亮	10-11
赴葬——送一個知音的朋友——「詩・中国語」	馮一水	12-13
希望「詩・中国語」	王■*2	12
海角草「詩・中国語」	羅毅	13
戰詩提倡及介紹「中国語」*3	夏烘秋	14-18
〈芸能春秋〉 濟南美術協会のこと	佐伯保	14-16
演劇慰問行	佐々木生	16-17
詩集『大地の呼声』に就いて*4	織田旗男	18-21
土謡十年	林海蔵	22-24
病——我的心在劇烈地躍動着於是我病了	西曼	24-25
作家氣質	房一介	25
午後の景「詩・他一篇」	大村皓三	26-27
戰陣詩篇「詩・三篇」*5	中山勝秀	28-29
山本元帥と僕達「詩」	織田旗男	30-31
手帳から	伊吹策	32-34

A子への便りに添へて	辻勝三郎	35-38
〈編輯後記〉	光亮	を 39-40
〈「廟」同人録〉		40
〈詩誌「廟」規約〉		40

- * 1 中国語併記。訳は「馮中一」。
- * 2 ■は女偏に燕。
- * 3 日本の詩を中国語に翻訳して紹介。吉田嘉七、近藤東、井上康文、長島三芳、風木雲太郎、田尾元子。
- * 4 夏烘秋の詩集『大地呼声』を日本語に翻訳・紹介。
- * 5 目次では「戦争と花」。

* 本稿は科学研究費補助金基盤研究(C)「日本占領下華北における日本語文学の様相に関する基礎的・発展的研究」(課題番号8K00335)の研究成果の一部である。